



新潮新書

Brevity is the soul of wit,
and tediousness the limbs and outward flourishes.

片野善一郎

KATANO Zenichiro

数学を愛した 作家たち

新潮社

167

片野善一郎 1925 (大正14)
京生まれ、東京物理学校 (現東京理科大学) 高等師範科数学部卒。
元富士短期大学教授。著書に『数学史の利用』『数学用語と記号ものがたり』ほか。

㊦ 新潮新書

167

すうがく あい さつ か
数学を愛した作家たち

かたのぜんいちろう
著 者 片野善一郎

2006年5月20日 発行

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社新潮社

〒162-8711 東京都新宿区矢来町71番地
編集部(03)3266-5430 読者係(03)3266-5111
<http://www.shinchosha.co.jp>

印刷所 錦明印刷株式会社

製本所 錦明印刷株式会社

©Zenichiro Katano 2006, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが
小社読者係宛お送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-610167-X C0241

価格はカバーに表示してあります。

⑤ 新潮新書

片野書庫
TATANO Zensho
江苏工业学院图书馆
数学を愛した作家たち
蔵書章

京 都 大 学 図 書

新潮社

数学を愛した作家たち——目次

はじめに、作家と数学

苦手組…司馬遼太郎と城山三郎／得意組…野村胡堂と安部公房／数学書で気分転換／芥川龍之介と菊池寛の数学観／数学小説

一、「坊っちゃん」より数学が得意——夏目漱石

数学と英語が苦手／建築科志望だった予科時代／親譲りの無鉄砲／数学は役にも立たない芸／漱石と物理学校の縁／帝大出の中学教師／「坊っちゃん」のモデル

二、試験さえなければ数学は面白い——正岡子規

英語に泣かされた受験生時代／「ズル」でも誤訳／英語で教えられていた数学／数学の論理性に注目／百点満点で十四点／俳句や和歌は明治年間に尽きる／短歌滅亡論の真意

三、数学教師は異常性格者——泉鏡花

「坊っちゃん」とは正反対／元生徒に片想い／恐るべき妄執／数学者は変人か／尾崎紅葉の主人公

四、数学ができなくて士官学校不合格——二葉亭四迷

軍人めざして数学を学ぶ／三度の落第／外国語学校、そしてロシアへ／試験中心の学校生活／学校数学を批判

63

五、幾何学で女房教育——石川達三

結婚の意義と理想／妻に満足するために／育児と初等幾何／妻の成長を自画自賛／数学の学習に意味はあるか

75

六、和算小説の先駆者——新田次郎

趣味の学問／熾烈な派閥争い／免許制度と秘密主義／算額で実力を競う／主人公のモデルは実在した／和算家には奇人変人が多い

85

七、日本の古典と計算——井原西鶴

御前様の名判決／江戸時代の数学遊戯集／町人の計算力／十五億円で「長者」／中国で生まれた九九／数学伝来は奈良時代／万葉集の語呂合わせ

99

八、九九を知らなかったイギリス貴族——スウィフト

イギリス政治を風刺／数学・科学万能の時代／渡航先の多くは数学王国／『ガリヴァー旅行記』のなかの計算／非実用的な数学や科学／政治家になった数学者たち／いずこもおなじ数学教育批判

117

九、数学にも偽善がある——スタンダール

グルノーブルきつての数学少年／宗教に対する憎悪／良質の師にめぐり合う／数学も信用できない／憧れのパリに失望

133

十、数学者の推理力はゼロだ——ポオ

飲酒癖と精神異常／名探偵デュパンの登場／数学者の推理、詩人の推理／分析は数学の専売特許にあらず／数学と数学者の偏狭さ／乱歩と幾何

147

十一、数学は数学以外のものへの刺激剤——ヴァレリー

軍人志望の文学少年／下手の横好き／五十を過ぎても数学書を読む／物なき行為の学／

161

おわりに、文学と論理、数学と情緒

役に立たない数学の論理／論理的思考力は国語科で／直観とイメージ思考／幾何学的精神と繊細の精神／「発見」のメカニズム／文学的創造と数学的思考／文科と理科の壁を越えて

あとがき 187

主要参考文献 189

はじめに、作家と数学

文学作品を読んでいると、数学に関する事柄が出てくるものがある。中には、数学者や数学教師が主人公になっている作品もある。文学者というと、一般に数学が苦手な人だと思われることが多いが、必ずしもそうではない。また、作品の中では数学や学校数学について批判的に書いている作家でも、エッセイ等では、小説の創作に数学的思考が役に立ったと書いていることもある。

本書では、多くの素晴らしい作品を残した作家たちが数学とどのように関わってきたか、数学をどのように考えていたか、数学や数学教師を作品の中でどう描いているか、といったことを、作者の生い立ちや当時の社会的・思想的背景と共に紹介する。

文学者の数学観や数学批判には的はずれなものもあるが、ユニークなものが多い。お

もしろいだけでなく、それぞれの時代の一般社会と数学とのかかわりや、いわゆる「理系」「文系」という分類、あるいは数学教育のあり方について考えるにあたっても、非常に参考になる。

苦手組…司馬遼太郎と城山三郎

数学は多くの人に毛嫌いされているが、特に作家など文学関係の人たちには数学嫌いが少なくない。作家の中には、数学ができなかったために自分の希望する進路を選べず、結果として文学を志したという人もいる。

文化勲章を受章した司馬遼太郎は、旧制中学での成績は中の上ぐらいだったが、数学が全くだめで旧制の大阪高校、弘前高校の入試に二年つづけて不合格になった。三年目に、入試に数学のない大阪外国語学校蒙古語部にやっと合格できた。彼は、本当は旧制高校へ入って東洋史の勉強をしたかったと言っている。

二十歳で学徒出陣したが、モンゴル語を専攻したため満州（現在の中国東北部）の戦車部隊へ配属された。戦車を使いこなすには一定期間訓練しなければならないので、し

ばらくは戦場へだされなかった。また司馬の場合は、訓練が終わってから内地の戦車部隊へ配属された。彼は、高校で東洋史を勉強していたら、恐らく歩兵にされてフィリピンあたりの激戦地へやられて戦死していたに違いないと書いている。数学ができなかったので、命拾いしたというのである（『風塵抄 一二』）。

経済小説で有名な城山三郎氏は、東京商科大学（現在の一橋大学）へ入学したが、数学ができないので理論経済学が理解できなかった。毎日、神田の研数学館へ通ったり、休暇には名古屋大学の講習会にまで行って数学の勉強をしたが、とうとうものにならず経済学をあきらめたという。彼の興味は数学を必要としない経済史の領域に移り、さらに人間的ドラマに魅力を感じて経済小説を書くようになったといっている（『薄情なやつ』、「数学セミナー」一九六四年六月号）。

また、明治の作家では二葉亭四迷は軍人志望だったが、数学が不得手で陸軍士官学校の入試に三回も落ちて、東京外国語学校露語科へ進み作家になった。

得意組・野村胡堂と安部公房

さて、これらの人とは逆に、数学ができたお陰でよい小説が書けるようになったと言っている作家もいる。

『銭形平次捕物控』などで有名な野村胡堂は旧制第一高等学校から東京帝国大学法科へ進学したが、父が死んで学費が払えなくなって退学させられ、新聞社へ勤めた後、作家へ転じた人である。彼は「捕物帖談義」で面白いことを書いている。

「私は中学時代、まことに仕様のない低能児であつたが、たった一つだけ将来性のある課目があつた、それはなんと『数学』であつたといったら、『嘘をつけ』と叱る人があるかもしれない。……なまけ者で通つていた私が、当時の入学試験中一番^むつかしいといわれた一高の入学試験にパスして悪友共を驚かしたのも、数学が満点近かつたためではあるまいかと、今でも考えているのである。

……私は数学が小器用に出来たおかげで小説を書くようになったのかもしれないのである。小説の中でも二二が四と数学的に整理されなければならない、捕物小説を書くようになったのは、まことに浅からぬ因縁というべきである」

彼はいろいろな人から、「あんな詭計トリックをどうして考えるのだ」ときかれた時、いつも「数学の問題を考えるようなものですよ、XII 0 から逆に考えていくのだ」と答えたという（『捕物小説は楽し』）。数学の問題を作るのも大変だが、それを解くのはもっと大変である。作る人は、問題の仕組みと答えを承知しているが、解く人には全く分からないからである。

芥川賞作家の安部公房は、中学高校時代から数学の成績は拔群だったという。彼は高校一年で三年までの教科書をやってしまい、二年からは大学の数学の勉強をした。数学は頭休めのレクリエーションのようなものだったという。安部は国語や歴史のような記憶力を必要とする学科は苦手だったが、数学ができたお陰で東大医学部へ入学できたと言っている（「数学型と語学型」、「数学セミナー」一九六三年一月号）。

数学書で気分転換

直木賞作家の立原正秋は、書きかけの小説が行き詰まったとき数学書、それも大学程度の本を読んだというから驚く。

「私は書きかけている小説が行きづまってくると、手あたり次第に数学書をひらく。小説のなかの人間関係というものは、もつとも非論理的である。非論理的な部分が見えなければ小説は書けない。しかしそれにも限度があり、なにも見えない時がある。そのときはじめて数学書をひらく。すると私の前にひとつの方程式が展開する。方程式ほど明晰なものはない。私は明晰なものを前にして、ああ、この明晰さはなんと虚しいことだろう、と思う。すると、行きづまっていた作中人物が動きはじめるのである。数学の諸先生方には申しわけないが、私は数学書をこのように利用している現状である。

直木賞を受けた『白い罌粟^{けし}』は、いまは亡い高木貞治の『解析概論』を読んでいるうちにヒントを得た」（「数学の想い出」、「数学セミナー」一九六七年七月号）

数式の行列をながめていて、一体どのようにしてどんな創作上のヒントが得られるのか、私にはさっぱり分らない。世界的数学者で整数論（類体論）の研究で有名な高木貞治の『解析概論』は、大学の数学科の学生に向けた入門書だった。こういう本を小説家が読んでいるということ自体、驚きである。

彼の『男性的人生論』（角川書店）には射影幾何学の解説が出てきたり、『愛をめぐる

人生論』（新潮社）にはフェルマーの定理が出てくるから、数学についてのかなりの知識を持っていたようである。ただし、そのことが小説の内容と直接に関わっているものではない。

フランスの詩人ポール・ヴァレリーは若い頃から数学に関心をもつて勉強していたし、スタンダールも中等学校時代は数学の成績は常にトップで、数学者を志して理工系の最高学府エコール・ポリテクニクの受験資格を与えられた程であった。数学が得意な文学者は、日本でも西洋でもかなりいたのである。

芥川龍之介と菊池寛の数学観

『羅生門』『鼻』などで知られる大正期の作家、芥川龍之介は、「文芸家たらんとする諸君に与ふ」という小文で、こう書いている。

「文芸家たらんとする中学生は、須らく数学を学ぶ事勤勉なるべし。然らずんばその頭脳常に理路を辿る事迂にして、到底一人前の文芸家にならざるものと覚悟せよ。

文芸家たらんとする中学生は、須らく体操を学ぶこと勤勉なるべし。然らずんばその